時間外開館とその問題点

—和歌山医大一—

特集 カウンター・サービス

曾我部 昭 美*

大学図書館において、時間外開館を、ただ利用者からの希望、或いはなんらかの必要があるから実施するという受身的なゆき方ではなく、国立大学図書館改善要項にも証われているように、図書館の方から積極的に、「学修意欲を増進」させるために実施するというのが、図書館活動の在り方から言って、望ましい姿であるのだろう。しかしながら、そのためには、図書館側に十分の受入態勢が必要である。つまり、人、予算その他において、先ず十分の配慮がなされていないとはなるまい。それが不十分な状態において、積極的に働きかけることは、非常に困難であるところで、この態勢が十分でなく、また容易に実現できないというのが今日の大方の実状のようである。だから現実には、多くの場合、時間外開館の希望乃至必要があるから実施する、もしなければ実施を見合わすということになりがちなのでなかろうか。また現に実施はしているが開館時間量その他が非常に不十分であるという場合も多いであろうし、さらになかには希望はあるけれども、態勢が非常に不備であるために実施できないという館もあろう。それからまた、これは図書館職員の労働時間と密接な関係にある間額であるから、少なくとも人的態勢が完全に整わない限り実施できないという場合があるかも知れない。

ところで今日、殆んどの大学において、時間外開館の希望乃至必要があるように見受けられる。今日の大学教育の方向からいって、より長く図書館を開放する必要のあるのは当

然であろう。例えば、和歌山大学附属図書館の調査(昭 39.10)によると、国立大学図書館(学部別)の場合、臨時を含めれば85%以上の館が夜間開館を、土曜午後開館まで含めれば、殆んど100%に近い館がなんらかの時間外開館を現に実施することが、それを裏書しているように思われる。医学図書館加盟館のみを取り上げてみても、約75%がやはりなんらかの時間外開館を実施している。(当館調査昭 38.6, 表3参照)そこで、その実状だが、先にもちょっと触れたように、各館の開館時間量、予算、勤務形態等の状況が大方満足なものであるとはいえず、またそれらについて、それぞれの館の間に相当の開きがあり、またまちまちであるということなどから推察して、いろいろと問題が横たわっているようである。つまり、必要上、なんらかの暫定的とも言える措置を講じて実施しているというのが、程度の差はあれ、多くの図書館の実状ではなかろうか。

さて、本学図書館の場合にも、その同じことが強く言える。当大学においても、時間外開館希望の声は以前からあり、図書館の懸案の一つであったが、大変に暫定的な措置を講じて、それに踏み切ってからまだ一年余にしかならない。それで編集部の求めに応ずるには大変おこがましい次第であるが、小図書館の場合として、その間の実状や問題点について以下述べてみたいと思う。

1. 本学における時間外開館の必要性

本学において時間外開館が必要であると考

* Akimi SOGABE 和歌山医科大学

えられる点は次のようなものである。

先ず、学生の講義終了時間が 16 時 30 分であり、17 時閉館では利用時間が極めて少ない、それに学生がレポートを要求される傾向は強くなってきている。次に、土曜午後も多くの学生は講義がある。またそれは学生、教職員を含めて一般に落着いて図書館を利用できる時間である。三に、臨床の教職員は昼間多忙で、図書館を利用する時間が乏しい等である。また事実、閉館時間を延長してほしいという声はしばしば聞かれた。

そこで、実施に先立って、先ず希望調査を取った。なお、日曜開館については、実現不可能とみてはじめから除外した。その結果(表 1)に随い、夜間(月～金)は 20 時まで土曜日は 17 時 30 分までと決定した。

<表 1>(%)

	希望者	希望閉館時間(主なもの)		
夜間開館	86	(19時) 21	(20) 33	(21) 25
土曜午後開館	82	(15時) 8	(16) 10	(17) 52

2. 人・時間外開館要員

(a) 当館の概況

時間外開館実施の鍵を握るものは言うまでもなく人である。そしてその人は、当然、定員化している専従職員であるのが最も望まれるべき形であろうと思う。しかしながら当館が講じているこの点の措置は大変に変則的なものである。即ち、「時差出勤プラス学生アルバイト」という形を取っている。

定員増の要求は容易に受け入れられない。また当館の職員態勢(男 1, 女 3)からは、多くの館で取られている超勤という形も問題がある。そこで、いつそのことパートタイマー制を採り、その賃金の予算化を最低の要求とすることにした。しかし、結果はそれも容

易ではなく、結局学生アルバイトにより、その賃金(謝礼に近いものが)も、あくまで予算獲得を前提と短期間ということで、教職員の負担によることになった。

(賃金の予算化はその後再三その要求にもかかわらずまだ実現されていない。もしこの状態がさらに続くようであればまたなんらかの対策を考えなければならない段階に来ていると思っている)

学生アルバイトは本学の学生で、固定した二名が交替で行なっている。仕事は貸出、返却図書や文献申込等の受付、複写(主としてセルフサービスだが)目録検索程度の簡単な閲覧事務である。時間は講義終了時間の関係で 18 時からである。

その時間までを館員の交替制による時差出勤でつなぐ。

土曜午後は館員による日直制である。

以上、当館の人的措置の概況であるが、その中から、またそれに関連して、幾つかの問題点を考えてみたい。

(b) 問題点

学生アルバイトによるカウンター・サービスは当然限られてくる。当初最低必要なこと位は指導するが、例えば、口題による簡単なレファレンス・サースなども多くは期待できない。また、長期の休暇中は帰省等で欠ける。時間外開館といっても、やはり頭数をそろえるだけでなく、よく訓練された、またされ得るほどに固定した人であることが望まれるわけである。

時差出勤については、普通の勤務を望むのは人情ではあるが、現在程度では特に問題はない。この勤務形態そのものの可否については別として。なお、時差出勤および学生アルバイトによる管理について事務局との間に多少の曲折はあったが、一つのきまりとして、文書に明示してもらっている。

次に、当館のように、図書館員が大学の当

直要員に含まれている場合は(土曜午後だけ除外してもらう)それだけ館員の負担になる。これなども考慮されなければならない問題の一つではないと思う。

以下、全般的な観点から少しつけ加えてみたい。

現在、国立大学図書館においても、時間外開館の専従職員を確保している館は5～6%にすぎないようである。他はすべて超勤、時差勤、当直制等の形を取っている。なかでも超勤は全体の約85%に及んでいる²⁾。医学図書館加盟館においても同じようなことが言える(表2)。このような状態が望ましいものでないことは言うまでもない。図書館会議等においても、このための定員増要求は取り上げられているようであるが、このような運動を一層盛り上げ、全体のレベルを上げる必要があると思う。当館のような小規模の図書館では総てにわたってレベル以下に押えられる傾向が強く、個々の図書館の努力もさることながら、やはり全体として取り上げるべき問題だと思う。

3. 開館時間量、利用度

時間外開館の時間量はどの位が望ましいであろうか。勿論これはそれぞれの大学の事情や教育方針等によって異なるから一概に決め難い問題であろう。しかし、一応の線は考えられると思う。例えば、近畿地区国公立図書館協議会から最近提出されている時間外用館定員要求書では、平日最低21時、土曜17時が望まれるとなっている。現状は勿論これをはるかに下回る。大方の人的態勢が不十分である以上当然のことである。例えば、国立大学図書館の場合、常時でなく、試験期とかにのみ臨時的に夜間開館を実施している館が相当あり(約30%)、また、常時でも、毎晩でなく、隔晩とか、週に一、二回とかがかなりある(約20%)。閉館時間も半数近くが、19

時までである²⁾。表3は医学図書館加盟館の場合である。

当館では時間外開館を実施して一年目に、利用者を対象に開館時間の再調査を行なってみたが、その結果、大体が現状のままで適当であるということであった。しかし、一部には、日曜開館の希望や、夏期休暇中の閉館時間の延長希望の声があった。これらについては現在のところ、当館においては考慮外という外はない、大学図書館の日曜開館は現状においては微々たるものにすぎないが、今後に残された問題であろう。

一方、当館のこの一年間の利用度についてみると、平日17時以後の一日平均利用者数17名、土曜午後20名となっている、利用度の波は試験期が高く、長期の休暇中は低い。また、夜間の利用度は18時半を過ぎると、落ちる。それから、臨床関係の教職員の利用度は初め予想したほど高くない。(その理由として、実験、アルバイト、多忙による疲労等も考えられるとのことであるが。)アンケート、特に希望事項に関するその結果は、そのまま信憑することはできないだろうが、全般に当初予想したりよも利用度は低いと思わざるを得ない。その理由については教育方法とか、また上述したような外的理由の外に、図書館側にも幾つか考えられる。図書が量質共に不十分であること、レファレンス・サービスの不足、環境不備(冷房、暖房も満足とは言えない。)PRの不足等。これらは別に時間外開館の場合にのみ限ったことではなからうが、この場合には比較的敏感に影響を与えるように思われる。なかでも、利用者からもよく言われるのであるが、図書、特に外国雑誌、学生参考書(禁帯出の学生参考書コーナーを設けているが)等の大幅な充実が望まれている。

時間外開館を実施することは、特に小図書館においては、いろいろと問題が多い。そし

て、時間外開館を真に意味あるものたらしめるためには、人は勿論のこと、あらゆる面からの図書館の充実の必要のあることが改めて痛感されるのである。

附記
「夜間開館の調査」を御恵贈下さり、またその使用を御快諾された和歌山大学附属図書館に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 和歌山大学附属図書館：夜間開館の調査 昭 39.10
- 2) 同 上

<表 2> 医学図書館時間外開館勤務形態

	実施回答館	勤 務 形 態					
		超勤制	時差勤制	当直制	超勤プラス 学生アルバイト	時差勤プラス 学生アルバイト	不 明
夜 間 開 館	26	15	6	2	1	1	—
土曜午後開館	26	14	4	6	—	—	1
日 曜 開 館	4	2	—	2	—	—	—

第 35 回 (1964) 日本医学図書館協会総会承合事項による

<表 3> 医学図書館時間外開館実施における閉館時間

	実施回答館	閉 館 時 間							
		14時	15	16	17	18	19	20	21
夜 間	25	—	—	—	—	8	8	5	4
土曜午後	35	1	5	8	17	2	—	1	1
日 曜	5	(午前中)		(12時~17)		(9 時~16)			
		3		1		1			

1963.6 当館調査